

I-2-2

インドネシア、ラマレラ村の捕鯨文化とその変化

沖縄国際大学
江上 幹幸

はじめに

ラマレラ村はインドネシア東部のレンバタ島南海岸に位置している捕鯨民の村である。「プレダン」 *peledang* と称する木造帆船を用いて、手投げ鉞でマッコウクジラやイトマキエイなどを捕獲し、山の民と農作物を物々交換する経済システムを維持している。クジラ肉を媒介とした山民との共生関係は400年の歴史を持っている。ラマレラ捕鯨と物々交換による山民との共生関係を、地域社会を含めてのラマレラ捕鯨文化として捉えることができる。

本報告では、ラマレラ村を概観したあと伝統的なクジラ漁と物々交換による経済を紹介する。そのあと21世紀以降の社会の近代化の影響で、ラマレラ村の社会と漁法がどのように変化してきたかをみる。

ラマレラ村の概観

インドネシア共和国は1万7500の島に2億4000万人が暮らす島嶼国家である。行政上33の州があり、ラマレラ村のあるレンバタ島は東ヌサトゥンガラ州に属する。レンバタ島は1999年にひとつの島だけでレンバタ県として東フローレス県から分離した。レンバタ島は南緯8度の熱帯に属し、面積は1266km²で沖縄島（1201km²）とほぼ同じ、人口はわずか10万人である。島民のおもな生業は農業で焼畑耕作によりトウモロコシ・陸稲栽培をおこなう。捕鯨はラマレラ村と隣のソロール島ラマケラ村だけの独自の文化である。

ラマレラ村は行政区としてはレンバタ県ウラン・ドニ郡ラマレラ上村とラマレラ下村からなり、約1700人が暮らす。捕鯨をおこなう人々はこの地の先住民ではない。伝承によると最初の祖先は16世紀ごろにインドネシア東部諸島からこの地に移住してきた、もともとサメ・ウミガメ・イトマキエイなどの鉞漁をしていた海民である。その後、西部諸島からのグループと島内山間部からのグループが段階的にこの地に移住し、現在 三つのグループ・19氏族が存在する。また、村には焼畑農耕民である先住民が現在も居住している。

宗教は住民のすべてがカトリックの信徒である。イエズス会宣教師が1886年にレンバタ島で初めての洗礼をラマレラの地でさづけ、それ以来の伝統で教育水準はとても高い。

男女の分業が確立しており、男は海に・女は山にという暮らしを守っている。男性は鉞漁でマッコウクジラ・マンタ・イトマキエイなどを捕獲し、小舟による流し網漁でトビウオなどの魚を得ている。また、造船大工、建築大工としても長けている（小島・えがみ 2004）。女性は行商「ブネタン」 *penetan* や定期市でクジラ肉を主食であるトウモロコシなどの穀物と物々交換し、

塩作り、石灰作り、機織りをおこない、イカットとよばれる緋織物は世界的に有名である。

ラマレラ村の伝統捕鯨と銆漁

世界でも稀な熱帯捕鯨をおこなうラマレラ村の伝統捕鯨は、手投げの離頭銆を打ち込んで仕留める突取捕鯨法であり、著者は《プレダン捕鯨》と呼称する（写真1）。全長10mのプレダンとよばれる木造帆船に10～13人ほどの漁師が乗り、手漕ぎで10m以上ある巨大なマッコウクジラに挑み、年間20頭ほどを捕獲している。マッコウクジラ以外にも大型魚を捕獲するが、生死をかけて捕獲するマッコウクジラはラマレラ語で「コテクラマ」*koteklema*と呼称し、他の獲物とは異なってさまざまなタブーがあり、漁法をはじめ、部位の分配も捕鯨慣習法に則り厳密に定められている（小島・江上 1999）。



写真1 「プレダン捕鯨」マッコウクジラにプレダンで挑む

何よりも重要な獲物は、その大きさゆえに村中に肉の分配がいきわたるマッコウクジラであるが、プレダンの銆漁ではそれ以外にも多くの種類の獲物を捕獲している。

おもな捕獲対象はゴンドウクジラ類・シャチ・アカボウクジラ・イルカ類の鯨類、魚類ではマンタ・イトマキエイのエイ類とジンベエザメ・シュモクザメなどサメ類やマンボウ、カジキ、マグロ、シイラなど、そのほかにアカウミガメ・タイマイ・オサガメなどのウミガメ類も捕獲している。銆漁では、海上で目視のできるほとんどすべての生物を捕獲対象としているが、ヒゲクジラ類は捕獲対象から除かれている。現在ではプレダンのほかに、船外機搭載の動力船がマッコウクジラを除いてプレダンと同種の獲物を対象に銆漁をおこなっている。

捕鯨と分配

マッコウクジラに遭遇すると、帆をおろして手漕ぎで近づいていく。舳先に立つのは「ラマファ」*lama fa*と称する銆打ちで、かれの技量に運命が託されている。

銆を打たれたクジラは船を曳いて一気に逃げようとし、うまく舵をとりきれないプレダンは転覆する。10回の銆打ちで4回～5回の割合で転覆するが、他のプレダンの助けをうけて復帰したあと、またクジラを追いかけて二番銆を打ちこむ。暴れるクジラをプレダンに引き寄せ、ラマファが一人泳いでクジラに近づき、背中に乗って包丁を入れてとどめをさす。数時間の格闘ののち、死んだクジラは一番銆を打ったプレダンに結びつけられ、捕獲に参加した船をロープでつなぎ、浜にクジラを曳いていく。

捕獲の翌日、干潮を待って解体が開始される。クジラを獲ったプレダンの船大工親方「アタ・

モラン」*ata molan*が分配法に沿って解体の目印を入れる。最初に頭部と体部の境目に目印を入れる。まず脂皮をはいでから赤身、内臓へと作業はすすんでいく。半身を解体し終わるとクジラを反転させて同じように解体していく。クジラ肉は捕鯨に参加したブレダンごとに分配し、そのあとそれぞれの船のラマファが捕鯨メンバーに分配する。

捕獲されたクジラの分配法は厳しく定められ、捕獲に関与したすべての者に何らかの分配がある。捨てる部位のないクジラは、余すところなく利用され、その巨体は村中にくまなくいきわたっていく。クジラは自家消費用の食料ではなく、物々交換で経済が成り立っているここでは、重要な資本であり、貨幣に代わるものである。またクジラについて貴重な獲物であるマンタの分配法なども定められている。

分配されたクジラ肉は女性や子どもなどの家族が海水で洗い、各家庭に運ばれていく。男性が切り分けたクジラ肉は女性が竿にかけて干し、一週間位で日干し肉に加工されて物々交換の貴重な資本になる。自家消費用の赤身は塩をしてから干して保存し、脂身から滴り落ちる油は集められてランプの油に利用する。干した脂身も食用となり交換される。こうして加工したクジラ肉は、女性の手により山の民のもとへ運ばれていく（小島・えがみ 2001）。

物々交換による共生的関係

物々交換の方法には行商と定期市の二つがある。定期市は山の民と海の民が出会う場所で、週に一度決まった曜日に開催される市である。行商は歩いて山の村に向かい物々交換をする方法で、「ブネタン」*penetan*と称する。真夜中の3時頃出発して、クジラ肉などと交換した50キロほどの重い穀物を頭上運搬して午後に村に戻るのが一般的で、行商は男たちの捕鯨と同じくらい命を賭けた過酷な仕事である。

定期市場や行商で物々交換される産物のうち重要な農産物は主食のトウモロコシ、そしてバナナである。農産物は6本が交換の基準単位で、この単位を「モガ」*monga*と称する。クジラ肉一切れは2モガの価値が決められ、トウモロコシやバナナ12本と交換される（小島・えがみ 2002）。

ラマレラ村の人々はクジラや鯨油という特殊な交易産物を持ちながらも、17世紀から歴史的に島外との交易をまったく行っていない（Barnes, R.H. 1996）。それは移住民であるラマレラ村の人々が先住民との共生的関係を構築するための戦術であったと推定される。（江上 2000）

クジラを原始貨幣として機能するように島内だけに流通させ、その価値を維持させることがラマレラの民にとって重要だったと考えられる。そのことにより物々交換経済を継続させ、それに支えられて緊密な共生社会を構築していくということが、主食を生産できない海民が、移住地での生き残りをかけた生計戦略であったと筆者は考えている（江上・小島 2000）。捕鯨の近代化と貨幣経済に移行しつつあるラマレラ村が、主食であるトウモロコシの獲得だけは、現在も山の民との物々交換経済によっている事実は、そのことを物語っている。

ラマレラ村における社会と捕鯨・漁の変遷

ラマレラ村の1999年から2009年まで約10年間にわたるおもな事項を年表に示した（表1）。まず、社会の変化とインフラの整備を概観する。1998年にスハルト体制が崩壊して1999年にワヒド新政権に代わり、地方分権化が推進されてレンバタ県が成立したことが変化の大きな要因となっている。

表1 ラマレラ村主要事項略年表

年	マッコウクジラ捕獲回数	ラマレラ村の漁に関する出来事	レンバタ県とラマレラ村の出来事	インドネシア国内の出来事
1999	6頭	11-12月 動力船3隻でゴンドウクジラを21頭捕獲 「動力船結漁」	10月15日 レンバタ県発足 *ラマレラ上村出身のビテル・ケラフ氏が県知事代行	10月 ワヒド新政権発足 * 地方行政法および中央・地方財政均衡法の法律制定 ラマレラ上村出身ソニー・ケラフ氏が環境大臣就任
2000	10頭	1月~3月 動力船3隻でゴンドウクジラを26頭捕獲	地方自治政府によるインフラ整備 (ラマレラ上村まで自動車道路工事) 5月6日 上村と下村を繋ぐ伝統的階段が道路拡張工事で崩壊	
2001	35頭	1995年以来的豊漁 4月 動力船10隻に増加「動力船結漁」へ移行 4月29日 動力船の捕鯨参加が村の授として承認され「動力船参加式ブレダグ捕鯨」導入	8月4日 県知事にアンドレアス氏就任 ビテル・ケラフ氏敗れる	8月 メガワティ新政権発足
2002	28頭	5月8日 村史上初、ブレダグ(ジャワテナ)船外機を搭載して初出漁「動力ブレダグ」導入	6月25日 県都レウオレバ(町)からラマレラ上村までトラックバス路線開通	10月12日 バリ島爆弾テロ事件
2003	18頭	漁期の不漁が顕著 動力船とベアを組み込むブレダグがマッコウクジラ捕獲で優位にたつ	定期船航路の廃止、陸路での輸送に移行 往復定期トラックバス2台に 8月20日 ラウンド二群発足	
2004	14頭	5月 動力船21隻に増加 「動力船結漁」普及 5月 ブレダグ出漁が減少 5月 「動力ブレダグ」船外機搭載用木枠が固定式に 5月 3頭捕獲以後捕獲なく漁期の不漁	3月30日 レウオレバ町中央市場全壊 ラマレラ村までの往復定期トラックバス4台に増加	10月21日 ユドヨノ新政権発足 * 地方行政法、中央・地方財政均衡法が改正 12月26日 スマトラ島沖大地震津波
2005	6頭	5月 ブレダグの出漁激減 7月12日 動力船4隻でザトウクジラ確保 ラマレラ史上初 8月11日 15ヶ月ぶりにクジラ捕獲	1月 石油燃料不足による高橋県都地域で携帯電話が利用可能になる 3月 レンバタ島干ばつで凶作になる 6月3日 国営電力会社による電力供給 ラマレラ村に初めて電気が入る	6月から地方首長直接選挙が開始 10月21日 石油燃料126.6パーセント大幅値上げ
2006	4頭	「動力ブレダグ」は4隻に増加 漁期に捕獲なし 1989年以来的閑寂な不漁	6月2日 直接首長選挙でアンドレアス氏県知事再選(2011年まで) 8月26日 県政府が金・銅鉱床の探鉱を許可 12月 ラマレラ村で携帯電話が利用可能に	5月27日 ジャワ島中部地震死者約6,000人
2007	43頭	1月28日 初の日曜日捕獲 5月2日 ラマレラ史上最大18mの白い巨鯨捕獲 36年ぶりの大漁 「動力船参加式ブレダグ捕鯨」普及	アメリカの環境団体Photovoiceが村民にデジタルカメラ50台を6ヶ月間貸与 写真展後ラマレラ村の記録保存のプログラム開始 (WWF、フォード基金、サンホナルジオグラフィック共催) 4月30日 WWFインドネシアがソロール諸島海域環境保護船「コテクラマ」号の進水式 7月 ラマレラに水産高校開校 11月20日 Photovoiceがラマレラ村にて写真展開催	3月6日 西スマトラ地震死者73人以上
2008	34頭	動力船28隻に増加、動力ブレダグ8隻に増加 捕鯨は「バレイ捕鯨」へ移行	ラマレラ村までの往復定期トラックバス6台に増加	1月27日 鳥インフルエンザ感染死者100人に 5月24日 石油燃料平均28.7%値上げ
2009	5頭	3月 地方政府網漁船2隻を村に援助 4月 夜間操業「動力船漁し網漁」導入 8月 「動力船漁し網漁」本格化 ブレダグは「バレイ捕鯨」で稼働	5月14日 マナド国際海洋会議にて「サウ諸海洋保護」制定、レンバタ島海域は除外される 7月 ラマレラ沿岸で他地域船による爆弾漁が活発化 10月29-30日 第1回「Festival Balo」を村で開催	5月11日 マナド市で国際海洋会議開催 7月8日 直接大統領選挙 10月20日 ユドヨノ新政権発足

2000年になって地方自治政府によるインフラ整備が急ピッチでなされ、ラマレラ村に自動車道路ができることになった。2000年5月に上村と下村を繋ぐ伝統的な階段「グリベ」 gripeが道路拡張工事で崩壊したことは、村の変化と近代化を象徴している。

2002年8月、2000年からのプロジェクトである道路建設が完成した。念願であった県都レウオレバ町から毎日一往復する定期トラックバス路線がラマレラ上村まで開通し、町への日帰りが可能となった。これにより、2003年には長年親しんできた定期船航路は廃止された。

2004年に4台に増加した定期トラックバスの普及は伝統的な女性の行商にも大きく影響した。定期的に出かける山間の行商もトラックバスを利用して行くようになった。何時間もかけて歩いて行った村はわずか30分ほどで到着する。トウモロコシやバナナが入った荷物を頭上に載せて山道を歩く姿は消えつつある。便利になった片面、現金を必要とする行商へと変化した。

2005年6月には、夜間のみではあるが国営電力会社による電力の供給が開始され、鯨油ランプの夜は消えた。つづく2006年12月には携帯電話の利用が可能となり、交通・電力・通信のインフラがほぼ整い、貨幣が必要とされる経済システムへと移行していった。

捕鯨・漁法の変遷

伝統漁法に変化の兆しが見られたのは、やはり2000年ころからである（江上 2007）。

1999年はラマレラ村が不漁に苦しんだ年である。その年の8月に6頭目が捕獲されてから2000年5月の漁期のはじまりまでマッコウクジラはまったく獲れなかった。この状況を救ったのが動力船（小型船に船外機を搭載したもの）による銆漁であった。その当時村にあった3隻の動力船で、2000年初めの休漁期に突取式による《動力船銆漁》でゴンドウクジラ類47頭を捕獲する大漁となった。これが契機となり、1995年以来3隻だった動力船が2001年初めには10隻に増加した。

〔2001年-動力船参加式プレダン捕鯨の導入〕 動力船の増加が捕鯨法にも画期的な変化を見せた。動力船の捕鯨への参加である。2001年4月29日のラマレラ慣習協議「トブ・ナマ・ファタ」*tobu nama fata*で“クジラを捕獲したプレダンを動力船が曳航して帰航した場合には、捕獲した部位のうち、「キレ」*kile*と呼ばれる胴部の一部を動力船の船主、乗組員に分配されること”が決定し、プレダン捕鯨への参加が正式に承認された。

マッコウクジラが浮上するのを確認すると、動力船はその場所までプレダンを曳航してクジラを追い、捕獲後もプレダンを曳航して村へ帰るという方法で間接的に捕鯨に参加することになった。筆者はこれを《動力船参加式プレダン捕鯨》と呼称する。動力船ではマッコウクジラ捕鯨はできない。船体が小さいこと、転覆時の船外機破損・紛失の危険性などが捕鯨に使用できない理由であるが、もっとも重大なことはラマレラ村の捕鯨慣習法に違反することである。

〔2002年-動力プレダンの導入〕 翌2002年5月8日ラマレラ捕鯨史上画期的な出来事があった。プレダンの船尾に着脱式木杵を装着して船外機の搭載を可能としたプレダンの考案、すなわち《動力プレダン》の出現である。プレダン「ジャワ・テナ」*Java Tene*号は船尾の木杵に15馬力の船外機を搭載して出漁し、浮上したクジラにいち早く追いつき、船外機を外して動力船に移したのちマッコウクジラを捕獲した。これ以降、プレダンと動力船の2隻を所有するグループが2隻ペアを組んで捕鯨することにより、クジラ捕獲頭数に明らかな差が生じた。

〔2004年-動力船銆漁の普及〕 2004年には船外機搭載用の固定式木杵「スピ」*sepi*を備えたプレダンが現れた。動力船の総数はプレダンの20隻を上回る21隻に増加した。プレダンのグループでは、プレダンと専属の動力船の2隻を所有するスタイルが普及する。また、動力船での銆漁が普及してプレダンの出漁が激減した年で、プレダンは5月の数週で毎日の出漁を取りやめている。若者が動力船で出漁したが、プレダンは最低8人と定められた乗組員の確保が困難になり漁に出られなくなったのである。

〔2005・2006年-不漁〕 2005年はマッコウクジラの年間捕獲頭数わずか5頭という不漁に見舞われた。そのほかに動力船銆漁でシャチを3頭捕獲している。2006年は1989年以来の深刻な不漁年となった。そのほかの鯨類では5月に動力船銆漁でアカボウクジラを1頭捕獲している。

〔2007年-動力船参加式プレダン捕鯨の普及〕 2007年は前年まで2年続きの不漁を打開するべく、カトリック教会神父の許可を得て、1月に初めて日曜日出漁での捕獲が実現した。漁期入り翌日の5月2日には体長18mで頭部の白い、ラマレラ捕鯨史上最大の雄鯨を捕獲し、これ以降年間捕獲数は43頭という36年ぶりの歴史的な大漁年となった。

この年は環境保護団体の活動が村で活発におこなわれた。アメリカの環境団体「Photovoices」が村民にデジタルカメラ50台を6ヶ月間貸して、写真展とセミナーを開催した。同時にWWFイ

インドネシアがソロール諸島海域の環境保護活動のための船「コテクラマ」号を活動させた。

[2008年-バレオ捕鯨に移行] 2008年は一度に複数のクジラがとれて大漁になった。新たな傾向として、毎日の漁は動力船釣漁に従事してプレダンは稼働させず、クジラの潮吹きを陸上から目視したときに「バレオ」*baleo*の合図がかかり出漁する、バレオ出漁が多くなった。このように緊急出漁しての捕鯨を筆者は《バレオ捕鯨》と称している。また、稼働しているプレダンは約半数の8隻が動力化した。

[2009年-動力船流し網漁の導入] 2009年はインドネシアの環境保護活動も活発化して、スラウエシ島のマナド市の「国際海洋会議」において「サウ海海洋保護区」が政府によって制定された。

漁期に入る直前の4月に大型の網が新たに動力船に導入されて、漁獲効率の大幅な向上が見られた。網漁の技術革新が顕著になり、捕鯨・釣漁と網漁の併存する新たな時代を迎えた。このことから夜間操業の《動力船流し網漁》を主体として、昼は浜で網具の手入れや補修をしながら、マッコウクジラの回遊を目視してから出漁する《バレオ捕鯨》へと大きく変容する可能性が考えられる。

マッコウクジラの捕獲頭数

ラマレラ村でのマッコウクジラの捕獲記録が残されているのは1960年以降である。1960年から2009年8月までの50年間の年別捕獲頭数は図1に示してある。記録のない年が6回ありデータとしては不十分であるが、現在までに887頭のマッコウクジラが捕獲されている。記録のない6年を考慮して半世紀でわずか1000頭余りである。これだけの頭数で2000人近い村人の生活が50年間にわたって成り立ってきた事実は、マンタ・イトマキエイなども捕獲して生きる糧になっているとはいえ、計算上では1頭で村人100人を1年間賄っていたことになり、クジラの持つ重要性は際立っている。

記録に残されている最多捕獲数は1969年の56頭、次いで1968年と1971年の43頭で、43頭の捕獲数を数えた2007年は歴史に残る大漁の年になった。いっぽう5頭以下という極端な不漁の年も5回だけであり、大漁に先立つ2005年と2006年の不漁は際だっている。

年度	捕獲頭数	総数									
1960	26	1970	37	1980	—	1990	12	2000	10		
1961	31	1971	43	1981	—	1991	15	2001	36		
1962	—	1972	36	1982	8	1992	10	2002	28		
1963	—	1973	23	1983	—	1993	8	2003	18		
1964	—	1974	23	1984	7	1994	10	2004	14		
1965	34	1975	21	1985	11	1995	40	2005	5		
1966	15	1976	—	1986	9	1996	18	2006	—		
1967	25	1977	21	1987	7	1997	22	2007	43		
1968	43	1978	15	1988	7	1998	31	2008	34		
1969	56	1979	15	1989	—	1999	6	2009	5		
小計	230	小計	234	小計	55	小計	172	小計	186		887

【備考】—は記録なし

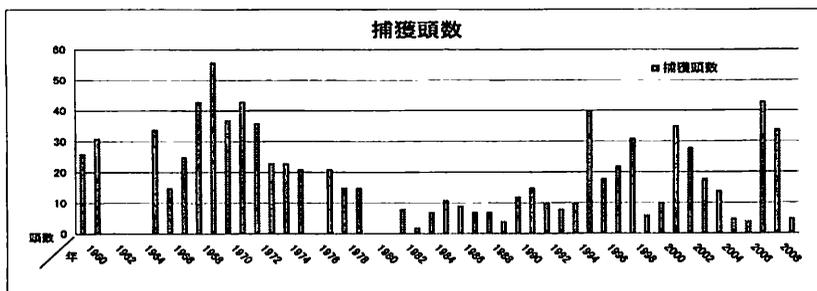


図1 50年間マッコウクジラ捕獲記録 1960-2009

[1994年～2009年のデータ]

調査を開始した1994年以降の捕獲回数と捕獲頭数の記録は筆者と共同研究者である小島曠太郎がデータを取り、それにもとづいて漁期別の捕獲回数と捕獲頭数を図2に示した。16年間の捕獲回数は150回あり、323頭が捕獲されている。年間平均捕獲頭数は約20頭、一回の捕鯨機会あたりの捕獲頭数は約2頭になる。

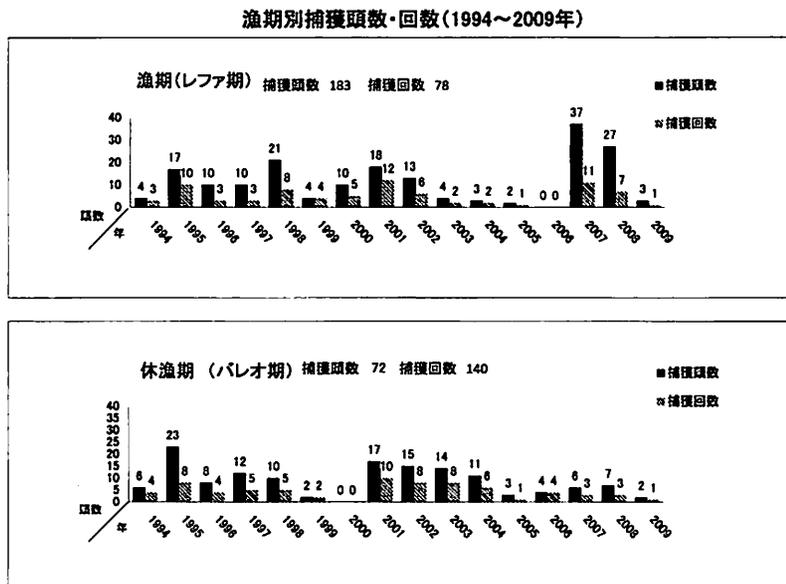


図2 漁期別マッコウクジラ捕獲記録 1994-2009

ラマレラ捕鯨では船団を組んで一頭のマッコウクジラを捕獲するわけではない。プレダン1隻で一頭を捕獲することをめざし、一番銛を打った船に応援を頼まれない場合には他のプレダンはクジラに手を出すことができない。しかし一般的には、一番銛を打った船は転覆することも多く、捕獲確率を上げるために僚船に応援を頼み、2～3隻で協力して一頭を捕獲することが多い。その場合もクジラ肉の配分を考えてなるべく少ない船数で捕獲することをめざしている。

捕鯨法が動力船でプレダンを曳航してクジラを追う動力船参加式になってからはクジラに接近できる機会が確実に増加し、群れで行動するクジラにプレダンが同時に接近することから、一回の捕鯨機会あたりの捕獲頭数が多くなったことが指摘できる。2007年と2008年は一回あたりの捕獲頭数が3頭以上に増加しているが、これは《動力船参加式プレダン捕鯨》が確立したことを理由としてあげられる。

[漁期別捕獲頭数] 漁期「レファ」Lefa期は気象条件が漁に適した5月から9月末頃までであり、プレダンはほぼ毎日出漁して銛漁をおこないながら、マッコウクジラが出現する機会を待つ捕鯨に切り替える方式で操業する。このような毎日操業の《レファ捕鯨》は2003年まで続いていた。気象条件により出漁できない時期は休漁期「パレオ」期であるが、クジラが捕獲できないわけではない。マッコウクジラの回遊があって海況がよければ出漁するからである。このような《パレオ捕鯨》は漁期でもおこなわれ、捕獲の確率は高くなっている。

漁期別にみると5月から9月までの漁期には78回の捕獲回数に183頭が捕獲され、10月から4月までの休漁期には72回の捕獲回数に140頭が捕獲されている。やはり漁期の捕獲は多く、1回あたりの捕獲頭数も漁期は2.3頭、休漁期は1.9頭と漁期が多くなっている。

〔月別捕獲頭数〕 各月別の統計図3を見ると、漁が開始される5月は圧倒的に捕獲頭数が多く、全体の約2割を占めている。次いで6月、7月、8月の漁の最盛期には平均して多く捕獲されている。いっぽうで9月の漁期終盤から10月、11月が少なく、ついで漁期前の2月、3月、4月が少なくなっている。1月は《バレオ捕鯨》での捕獲頭数が多い。

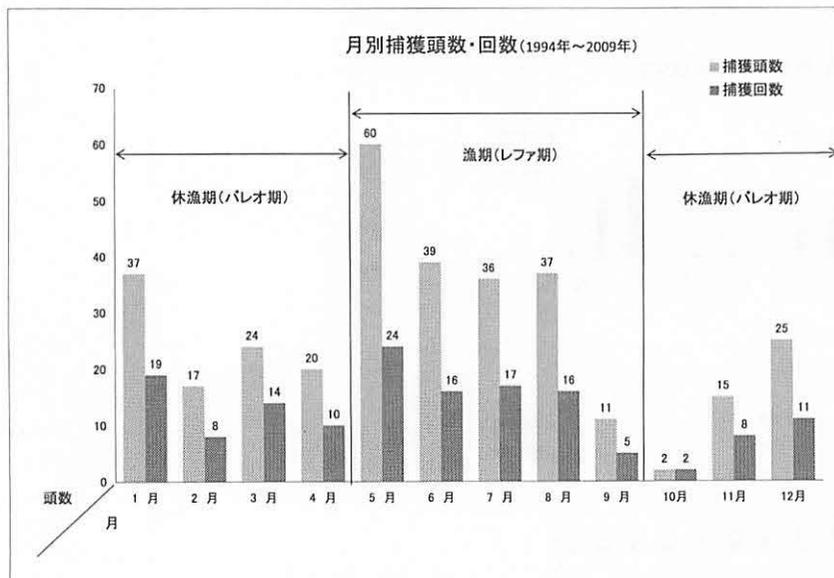


図3 月別 マッコウクジラ捕獲記録 1994-2009

現在の船と漁業形態

現在ラマレラ村で使用されている船には伝統帆船のプレダン、動力船、サパンの3種類がある。プレダンは捕鯨と銆漁をおこなっている。プレダン捕鯨は2001年に《動力船参加式プレダン捕鯨》を導入し、2008年からは主にバレオ時に出漁する《バレオ捕鯨》に移行しつつある。プレダン銆漁は2002年に《動力プレダン》を導入した。2009年にはプレダン銆漁そのものが衰退の兆しをみせている。

動力船は銆漁と流し網漁をおこなっている。動力船はプレダンの20隻を上回る27隻を数える。《動力船銆漁》は主にイトマキエイ・イルカ類を獲物にしている。《動力船流し網漁》は2009年4月に新たに操業した。網目5インチで大型の網が導入され、夜間操業で主にイトマキエイを対象としている。これは従来小舟でおこなっていた流し網漁の網具の規模を大きくした漁で、漁獲効率がよく、このさき銆漁から網漁に移行する可能性は大きい。

サパンの《小舟流し網漁》は小舟の所有者が個人でおこなう漁である。昼間操業で主にトビウオを対象とした網目1.5インチのものと、夜間操業で主にイトマキエイを対象とした網目5インチものがおこなわれている。サパンは対象獲物に遭遇すれば銆漁もおこない、多くの若者が操業している。

おわりに

ラマレラ捕鯨におけるクジラは主食である穀物を手に入れるための資本であり、このため女性の行商による物々交換が重要な役割を占め、山の民との共生関係がなりたっている。こうした山の民との共生関係と伝統捕鯨を含めたものがラマレラ捕鯨文化である。

伝統捕鯨については、プレダンは2002年から導入された船外機搭載の動力プレダンにより手

漕ぎ帆走から動力化されて銆漁をおこなうが、マッコウクジラ捕鯨では使用できない。手投げ銆を使用する突取式の伝統捕鯨、《プレダン捕鯨》はまったく変化していない。

いっぽう、2007年ころから環境保護団体からの圧力や、貨幣経済への移行が加速されるなかで新たな漁法をも模索している。社会の近代化に伴い、従来の生活必需品購入費・教育費のほかに動力船の燃料費や行商・市場に通う交通運賃、電気代、通信費などに多くの現金が必要となっている。こうした貨幣経済に移行する中で、2009年には漁獲効率を求めて銆漁から網漁へと転換が図られようとしている。現金化可能な魚種や鮮魚の新たな市場開発も今後の課題としてあげられる。

今後は、歴史的に銆漁しかなかった生き方に網漁が導入され、捕鯨と併存していくことが考えられる。その場合のプレダン捕鯨は、毎日出漁してクジラを探す《レファ捕鯨》からクジラの出現があって始めて出漁する《パレオ捕鯨》のみになる可能性が高い。稼働させないプレダンのメンテナンスも問題となろう。

仮に、将来的にクジラと穀物の交換に貨幣が関わる市場経済へと移行すれば、物々交換により保持していた山の民との共生関係に変化が生じ、ラマレラ捕鯨文化の主要な部分に変容することになる。社会の近代化の流れが急激に押し寄せ、伝統文化が変容していく。貨幣経済への移行により世界で唯一残るマッコウクジラ捕鯨文化が変容し、やがては消滅してしまうのか。これからも村の変化を見守り、ラマレラ捕鯨文化とその歴史を記録にとどめていきたい。

参考文献

江上幹幸

2000「インドネシア、ラマレラ村の経済システム—物々交換による共生社会—」『高宮廣衛先生古稀記念論集 琉球・東アジアの人と文化』下巻 pp.325-3 高宮先生古稀記念刊行会

2007「インドネシア・ラマレラ村の捕鯨と近代化」『文化遺産の世界』Vol.24 pp.14-17 国際航業(株)文化事業部

江上幹幸・小島曠太郎

2000「インドネシア、ラマレラ村における生存捕鯨—その食文化と流通—」『社会文化研究』3-1 pp.91-123 沖縄国際大学

2010「インドネシア、ラマレラ村16年間の捕鯨記録と分析(1) —1994年～2009年—」『社会文化研究』12-1 pp.1-32 沖縄国際大学

小島曠太郎・江上幹幸

1999『クジラと生きる』中公新書

小島曠太郎・えがみともこ

2001『クジラがとれた日』ポプラ社

2002『クジラがくれた力』ポプラ社

2004『クジラにいどむ船』ポプラ社

Barnes,R.H.

1996 “Sea Hunters of Indonesia. Fishers and Weavers of Lamalera” Clarendon Press・Oxford